



ルカ福音書 1-2章 バプテスマのヨハネについて 詳しく述べるのはなぜ？

ルカ 1:-2: バプテスマのヨハネについて詳しく述べるのはなぜ？ 2017.7.4

ルカ: 聖霊の働き + 父の家^{悔い改め}に帰る = 永遠のいのち (vs 世) ... 預言の働き
(主の道) ^{おぼえる}

・ **エリヤ** 主の道 (マタイ 18:19, 40:12...)

1:15-17 主の使いのことば ^{荒野}) 主の道を備え

1:26-29 父ゼカリヤの預言) 立ち返らせる 喜劇

3:4 イザヤ40:3- ^{40:1 慰め}) 荒れを ^{荒れ} 癒す (イザヤ41:3 慰め 2. エデンの園 喜劇)

4:24-27 エリヤが子を復活。エリシがきおぬ。

(18:17:22) (エリシが子を復活 25:14)

エリヤは、アバ、イゼバルと偶像崇拜と戦った

主に立ち返らせる働きをした。(父ゼカリヤの道に)

エリシは、その働きを継承する ^{エリヤx8} ^{エリシx16} モーセの霊 → ヨシヤ

エ7- 25:12: エリヤの霊 x2 ^{ルカ 17} 夜 367? ^{申命記 18} ^{申命記 34} 9

(サウエル) ^{マダバの道}

不妊のハンナ (ヨナ) から生まれた。

ハンナ - 夫エリカは、レビ人 (1歴6:)

ハンナは「誓い」 - エリセバ - 誓い、アロンの妻

マリヤの姉 ← ハンナの姉

生まれる前からサウル人 (ヨナ、サウエル、サウエル)

王に油を注ぐ - 主の霊が注ぎ下る。

サウエルは男アビヤ ^{サウエル、ダビデ (サウエル、エフ)} ^{オテニエル、ゼボオン}

ルカ2: シメオン (= サウエル) イスラエルの慰め

アナン (ハンナ) エリカらの隣

少年が成長し... サウエル、ヨナ、イエス

ルカ福音書の1章から2章。

バプテスマのヨハネについての話が長く述べられています。なぜでしょうね。生まれるところも長いですし、その預言されているところも長いです。ルカ福音書の全体は、聖霊の働き、そして、主の道に導かれて悔い改めて父の家に帰るといことが中心のテーマですね。つまり、御霊に導かれて父の家に帰るといことは、永遠のいのちをいただくといこと。この世と戦って、この世のいのちではなくて、永遠のいのちを得るといことを教えてくれます。それが預言者の働き、御霊に導かれて民を父のもとに導くといために遣わされているものといこと。バプテスマのヨハネが、エリアのようなものだといのは、ルカ福音書の中で直接言われています。

主の使いのことば、父ゼカリヤの預言、イザヤ40章に書いてあること、ルカの4章24節からのところなどを見ると、確かにエリアのようなものだといことが分かるかと思えます。「主の道を備え立ち返らせるそうすると喜び楽しむことになります」といっているこの「主の道」といのは、アブラハムの約束の中にも出てきますし、申命記10章のところ「主が求めておられることは何ですか」といこと言われると「主の命令を守り主の道に歩むこと」と答える。その主の道ですね。

イザヤ40章のところに、「その荒野で呼ぶ声がする」ということがあります。40章はイザヤの新しい段落の初め「慰めよ、慰めよ」というところ。51章3節も「慰める」という話があって、同じように「荒野がエデンの園のようになり、喜び楽しむものとなります」と言っているところがありますから、「荒野で主の道に歩む、エデンの園が回復する」。これは、「立ち返る、園が元に戻る」ということが並行しているということは、こういうところから分かるかと思います。

エリアのところ、「子が蘇る」ということが言われていますけど、ここは、エリアがとは言わないのですが、子が蘇ったということが言われているところですね。同じようにエリシャも、第2列王記のところで子供が蘇るとあります。エリアが子供を蘇らせ、エリシャが子供を蘇らせ、イエスが子供を蘇らせるというところに繋がってますね。エリアが父でエリシャな子ですから、バプテスマのヨハネが父で、イエス様はその子供のようなもの。モーセとヨシュアのようなものということだと思いますけれど、両方とも父と子だから、同じような働きをするわけですね。父エリアの方は、アハズ、イゼベルと戦う。バアル崇拜と戦って父ダビデの道に立ち返らせるという働きをします。バプテスマのヨハネも、ヘロデ、ヘロデヤと戦うというところですね。

エリシャはその働きを継承します。イエス様もヨハネの働きを継承します。エリシャは奇跡を行った回数としてはエリアより多いです。エリアが8回に対して、エリシャが16回。自分がやったのが15回で、骨に触れたものが立ち上がるということが16回目というような感じで数えられるのだと思いますけれども、エリアの霊が2倍、長男のようなものですね。それで「モーセの霊がヨシュアに」ということも言われていますので、御霊を相続する長男という御霊を与えるエリア、御霊のバプテスマが天から下ると言っているところも思い出して、全部が1対1で対応しているわけではないのですけれど、いろいろな箇所が連想するように書かれているものだと思います。

もう1つ、直接サムエルと言われませんが、サムエルを連想させることが、多すぎるといぐらいいっぱいあります。不妊の女ハンナから生まれました。ハンナという名前はヨハンナやヨハネという言葉。名前と同じような恵みの名前ですね。「恵み」という名前、不妊の女ハンナからサムエルが生まれましたけど、ここでは「ヨハネ、ハンナと名付けなさい」みたいな感じになっています。ハンナの夫はエルカナ。エルカナはレビ人でした。バプテスマのヨハネの父のザカリアもレビ人です。レビ人だということはサムエル記の方だと分からないんですけど、第1列王記の方に、はっきりとレビ人だという系列が書かれています。そして、ザカリアの妻、エリサベツという人が出てきますね。エリサベツというのはエリセバからきていて、アロンの妻の名前で、そこにしか出てきません。そのエリセバは「誓い」と、セバは「7」という意味だと思いますけど、誓いを表しています。ハンナは誓う人でしたね。そして、マリアの歌。ミリアムの歌とハンナの歌。ハンナの歌を引用するマリア、ミリアムの歌ということで、アロンもミリアムもここにいますね。

「生まれる前からのナジル人」。祭司の務めを一時的に果たすという意味でナジル人。ここでヨハネが生まれる前から聖霊に満たされて、ナジル人のようなものですね。サムソンも生まれる前からナジル人でした。サムエルも生まれる前から捧げられているという意味で、ここで似ている人たちが出ています。

王様に油を注ぐと「主の霊が激しく下る」ということは、サウル、ダビデ。そして、サムエルじゃないですけど、サムソン、エフタ、オテニエル、ギデオン。この辺の人たちは「主の霊が激しく下る」という人たちですね。その士師の最後の人サムエルが、次の時代の王様に油を注ぐということです。

ルカの2章、生まれるストーリーの最後の辺りに、シメオンという老人と、アンナという人が出てきます。シメオンは「イスラエルの慰めを待ち望んでいた」アンナは「エルサレムの贖いを待ち望んでいた」という人たちです。シメオンという名前は「聞く」。サムエルも「聞く」ということで、似ているような名前のグループですね。聞くということの中心の名前。アンナはハンナのHが抜けている発音だということですから、同じ名前のハンナ。ここにシメオン(サムエル聞く)ですけども、サムエルとハンナがここ(ルカ)にいるというのも見えますね。

「少年が成長して神と人ともに愛された」という言い方は、このバプテスマのヨハネとイエス様、それとサムエルのところに書いてあります。サムエルとは直接書いてないですね。エリアということはいつも連想するのですが、サムエルという名前は出てこないのです。しかし、サムエルを連想するストーリーの背景がたくさんありますので、王様に油注ぐ、ダビデの道というのを確かにするサムエル、主の道に立ち返らせるエリアというのがこのバプテスマのヨハネの話から強調されているところであろうということです。

ルカの1章と2章は、全体のルカの中で「新しく生まれる」ということが大切な段落になっていると思います。主の道を整えるヨハネ、そして救い永遠の生命与えるヨシュア。新しいヨシュアというこの2人の生まれは、園の始まり、創世記の2章のような感じですね。園の始まりを表しているような新しい園の中心に、善悪の知識、悔い改めて主を知るということを教えるヨハネと、救いといのちを与えるヨシュア、イエスというものがこの園の始まり、永遠の命の祝福の始まりの書物の中に、2本の木のようなものとして書かれているということです。そして、このバプテスマのヨハネの働きというのが、「永遠のいのちを与える、復活して勝利する」というテーマの書物の中で強調されているのかなというふうに思います。